森びと・「心の宝物」

・・・・足尾・森づくりスタッフの伝言・・・・

二〇二〇年十一月

ＮＰＯ法人森びとプロジェクト委員会

「臼沢の森」を支える間伐材の階段よ、ありがとう！

相川好夫(千葉県・七四歳)

森びとインストラクター養成講座に参加して早いもので一五年が過ぎました。生まれて初めて足尾に行き、講座で踏査した久蔵沢の自然環境の状態を見ました。そこは草が無く、土は流され、岩がむき出しの山でした。これが企業経営者、人間の行なった公害・自然破壊なのだと驚愕しました。この自然は元に戻るのだろうかと思いながら、私が住んでいる房総の地は恵まれていると感じました。

宮脇昭先生からは、潜在自然植生、地域に生きていたふるさとの木を密植・混植することの意味と、その植え方を教えていただきました。木は根が大事であり、それは土がいのちであることを改めて実践的に学び、それは今でも心に残っています。学んだ事を体験し、経験を積み重ねて知識が知恵になっていくことを学んだ気がします。

その後の森づくりの講演会、見学会、各地の植樹祭に参加しているうちに、自然を観察する視点が変わりました。第一回の植樹は、足尾の臼沢のきつい斜面に黒土、腐葉土、炭粉等を担ぎ上げ、穴を掘ってそれらを混ぜて数種の木を密植しました。毎年頂上に向かって植林していく計画でしたので、その場所に登る階段が必要になっていました。私は、地元のハイキングコースの整備をしていたので、間伐材を利用した階段造りのアドバイスをしました。その結果、臼沢に六百段もの階段を造ることができ、その階段は今でも森づくりに役立っています。足尾での森作業報告をブログで見るたびに、私は嬉しい気分になっています。

最近は、大型台風・集中豪雨などが頻繁に発生しています。昨年、私もその被害に遭いました。その原因は地球温暖化と言われていますが、毎年のように襲ってくる大雨や巨大台風には不安が付きまとっています。また、海では漁場が変化し、定置網は時期がずれて魚が獲れなくなる現象も出ています。

自宅から見下ろす海岸防風林は三〇年から五〇年のクロマツが枯れ続けています。低い場所から高い所の松枯れが広がっています。この松は、小学生の頃にマツクイムシで枯れた後に植林したものです。台風の高潮で海水が滲み込み、コンクリートの防潮堤をめぐらして植えましたが、それが枯れています。コンクリート防潮堤により地下水の流れが遮断され、水位が上がって枯れたのではないかと思っています。

東京湾での海苔養殖はマテバシイの枝を海に刺していました。そのためにマテバシイを植えましたので、在来種は伐採され、この辺の森はマテバシイが主木となっています。現地ではこの枝を「ひび」と言っていました。この頃、このマテバシイの枯れが広がっています。昨年の台風一五号の強風で枯れたのかと思っていましたが、木の元から枯れています。枯れて元のふるさとの森になってほしいと願っています。

このような地元の森の変化を観ていると、福島県金山町の国有林で実証実験した炭による樹勢回復活動を思い出します。何らかの影響で樹が衰弱して、虫(通称：カシナガ)が穿孔

しているのかもしれません。自然界からの忠告ではないかと思い、注目し、観察を続けていきたいと思っています。

森の木々に宿る「森は大切な友だち」

今村　博（秋田県・六六歳）

世界中がコロナ禍、秋田県内でも感染者が拡大している。お盆だというのに子供達は帰省できず、お寺の住職からは自粛の要請があり、お墓参りもままならなかった。御先祖様も嘆いているに違いない。

宮脇先生は「人類は生物集団の中で最も強い立場にあり、思いのままに発展しているように思えるが、ほんのわずかな自然の揺り戻しや様々な環境の急変が起きた時、最初に責任をとらされることを知っておく必要があろう」と警鐘を鳴らしていた一五年前。今、コロナ禍にあって、その警鐘が身に沁みている。

京都大学総長の山極寿一さんが述べていた「近年のウイルス性の感染症は、自然破壊によって野生動物との接触を加速したことが原因」「深海や氷河の下に眠っている未知の微生物やウイルスを引きずり出してしまうかもしれない」「開発の手を抑えても、地球温暖化は生物の動きを変え、新たな脅威をもたらす可能性がある」ということはその通りだと思う。

残念なことは、世界のトップリーダーが経済活動の基盤であるアマゾンの熱帯雨林や海洋の森を衰弱させていること。南極の氷の中や凍土の中に潜んでいる未知のウイルスは外へ抜け出すチャンスを覗っているようだ。

報道機関は日々の新型コロナウイルスの感染者数や政府の対応問題を焦点にして繰り返し報道している。しかし、根本的な問題は、新型コロナウイルス感染拡大を容易にしたグローバル市場経済活動の行き過ぎとそれを後押しした政治が問題である。経済活動で人が吐き出す汚染物質を自然界が吸収できないアンバランスなところに問題の核心点があると思う。

私は、「山と心に木を植える」を合言葉に、二酸化炭素を吸収し酸素をつくる本物の森づくりを目指してきた。当初は、生きていくうえで自分が必要とする酸素を作ってくれる木を自分で植えよう！とドングリを拾い、苗を育て、八幡平市の松尾鉱山跡地に木を植えてきた。私は、「第一回足尾ふるさとの森づくり」に参加したが、その森の生長ぶりを確かめてみたい。何よりも確かめてみたいことは、森と言われるまでの森びとスタッフの情熱と実行力の凄さである。「緑が多くなりましたね」と言われるほどに生長した森に宿るスタッフの心に植えられた木を共有しなくてはならないと思う。森びと秋田県ファンクラブの活動のひとつである小坂銅山跡地の「ＤＯＷＡの植樹」は今年、中止になった。何もかも自粛という社会ですが、これまでの森づくり活動の延長線上ではない活動を創りだしていきたい。三蜜を

避けながらの森づくりはできないことはない。私たち森びとインストラクターが、考え、行動する時を迎えている。秋田の地から、新しい山と心に木を植えていきたい。

森づくりで磨いた技と心を次世代へ

大塚忠孝(埼玉県・七五歳)

願いが共通する幾多の人が“森びと”の旗の下に集い、それぞれが持つ理念をひとつに集約して始まったのが森づくりプロジェクトでした。

時に、多勢の人が参加して、森づくりはとても盛況な時がありました。たまにしか参加できない私には知る由も無い運営の難しい局面に、立場のある方々はどれほど胃や心を痛めたことでしょう。とてもとてもお疲れさまでした。

それが時代の変化でしょうか、植樹地提供者の前向きな理解が得られなかったことなのか、「あいつらまた来てやっている」と言った傍観者なのか、地元住民の参加を殆どみなかったことが象徴的であり、残念なことでした。

ところでNPO法人が臨時総会で解散するという話ですが、一五年間の森づくり事業は新しい組織が担っていくということになれば、それまでに磨いてきた技と心の引き継ぎが欠かせません。と言っても、以前の方法を踏襲するだけでは前の轍を踏むことになりかねません。どうぞ老舗の暖簾継承のように、新しい発想と技が展開されますよう願って止みません。

体力勝負の森づくりが感動を呼ぶ森に育つ

加賀　春吾(栃木県・六六歳)

私が森びとプロジェクト委員会の足尾植林活動に携わったのは二〇〇四年秋、故・岸井前理事長、宮脇最高顧問、そして後に理事になる方たちが下見に足尾を訪れた時、地元宇都宮から参加しろと声をかけられて同行したのが始まりだった。

当時、私が所属していたＪＲ東労組は、足尾銅山の鉱毒・煙害による環境破壊、労働組合発祥地と労働者の闘い、第二次大戦時の中国人・朝鮮人強制連行・強制労働、自然環境回復の植樹活動を学習していた。そのガイドしていた私は毎日が緊張の連続であった。従って、下見に声をかけられたことはその延長線上だと思っていた。森づくり運動の下見だと知ったのはその後のことであった。

現地に入った時、旧松木村跡、赤倉、小滝、銀山平などの足尾町周辺を回っていたことは覚えているが、植生調査をしていた記憶はない。最近知ったのだが、それは「臼沢」に植え

る“ふるさとの木”を選定するためであった。恥ずかしい話だが、「ふるさとの木によるいのちの森づくり」ということはそう言うことであった。

今年の夏から始めている「日光城山の森づくり」ではそのことを思い出し、森びとインストラクターの皆さんが城山周辺の木々を調べている。周辺の住民からすれば、春の桜や秋の紅葉を楽しみたいが、住民の命を育む森の恵みを享受できる森に育ってほしいと願っている。ただ単に木を植えるというものではない。私が生存しているその土台をつくっていることを改めて実感している。

当初の足尾の森作業は、とにかく体力勝負の仕事であった。五〇歳代の筋肉がパンパンになり、何日も筋肉痛が続いていた。「もう二度と足尾には行かない」という声を何人もの人から聞いた。私も筋肉痛はあったが、むしろ楽しく、作業の参考にもなった。

作業日の朝は、毎日、お茶を飲みながらのミーティング。先輩の鎌田さんと小井土さんの意見交換は闘いそのものだった。自分の意見を通す迫力、作業現場を見据えた具体的な作業方法をめぐった話合いは、森づくりにかける熱い情熱を感じていた。どちらかの方法で作業はすすめられたが、黙々と森作業をしているスタッフの姿に、私の気持ちは鍛えられている気がしている。

作業後の達成感を共有する場面の笑顔は私たちスタッフの強い絆を織っている。気温三〇度以上ある日の草刈りは汗が流れ出す。草を刈ると、草にうずもれていた苗木に光が当り、下から吹き上げる沢風が苗木を揺らす。この瞬間を見ていると何とも言えない気持ちになる。また、昨年春、ツキノワグマが「臼沢の森」で昼寝をしていた。生態調査をしている人から、冬眠が明けて、「柔らかい植物を食べてのんびりしているのではないか」と言われながらその様子を見た時は、嬉しかった。その後も、木を植えている「臼沢西の森」に現れた熊をカメラに撮ることができたが、その時は手が震えて興奮状態になった。

森づくりは新しい世界観へ私を誘ってくれている。労働現場から社会を見ていた私にとってはとても新鮮な気がしている。市場経済の在り方、私たちの生活の在り方が問われている現代社会の中で、森と生きる希望が見えてくるように、これからも頑張っていきたい。

何ひとつ無駄がない森を子孫に遺したい

鎌田孝男(栃木県・七八歳)

現役を退いた年のある日、先陣を切って森づくり活動をされている二人の訪問を受け森びとプロジェクトに関わることになった。

森びとを設立した諸先輩、先生方から「条件の悪いところで本物の森を作るのだ」という言葉を聞いて、森びと設立直後の私は、一〇代まで過ごした北上山地の盆地で過ごしていたことを思い出した。

当時の農家の生活は、農繁期以外は山仕事をしていた。一年分の薪用木材の間伐、その材を馬と人力で運搬し、その馬の餌用の干し草刈りなど、子供ながら見てきたことが甦った。これが足尾の森作業に活かされていると思っている。そのように考えると、家族が生きていくために、親が必死になって森や草地に向き合っていたことが私の身体に沁みついていたことに感謝である。

足尾現場での森づくりに立ってみると、ある著名人が言っていた「人生にはひとつの無駄もない」ということを思い出した。肥沃な表土が雨風に流され、砂と石に化したはげ山を見て愕然とした当時。宮脇先生からは、「木は根、根は土、土が無ければ運べばいい」と教えられたので、私にも何かできるのではないかと考えていた。

そのヒントは実家の生活の中にあった。当時は、何ひとつ無駄にしていなかった。暮らしの多くが森や里の植物の恵みを受けていたこと、使い終わった木っ端や消費した後の「ゴミ」も今で言う再利用みたいなもので、何ひとつ無駄にしていなかった。

自宅周辺は不在地主が多く、住宅予定地が放置されている。当然、落ち葉や枯れ枝が側溝に積もっている。“立派な腐葉土はもったいない。木は根、根は土が命だ”と思って、暇をみつけては腐葉土として使える堆積物を袋詰めにしてきた。今では、足尾の植樹の根の栄養となり、元気な森の生長に役立っていると思う。それは、自宅周辺の環境整備になり、一石二鳥の効果だと自負している。

足尾の森づくりの当初は、どんぐり(種)から苗木を育てていた。その苗床を見て、私は目から鱗であった。私の分身のような苗木を足尾の荒地に植えたいという気持ちになり、早速、挑戦した。自宅周辺の散歩の途中に、公園散策の時に、月一度の登山では、どんぐり(種)探しに目が向き、採取するようになった。自宅の庭での試行錯誤の育苗では七～八種類の苗を育てることができた。私の分身は足尾・松木村跡地で森の一員として、本物の森へ根を張っている。

植樹祭で私の分身を植えてくれた皆さん、スタッフの皆さん、ありがとうございました。喜寿を過ぎましたが、これまで森づくりを継続できたことは第二の人生の宝物です。相変わらず足尾の森(杜)では獣害被害に遭っていますが、「子孫に森を残せ」の教えを忠実に守り、実行していきたい。

スタッフのこだわりが足尾の森(杜)になった！

小井土英一(群馬県・七三歳)

足尾に入るときは己の意見をまとめてきた。何故なら、足尾の森づくりスタッフの多くは、森の作業に関する意見を持ち合わせていなかったからだ。と同時に、初めての取り組みであるから、それぞれの知恵を出し合うことが失敗を少なくするのではないかと思ったからである。

「今日の作業は何をすべきか」を述べ、事務局の作業計画と練り合わせて作業はすすめられてきた。意見の対立はあったけれどそれで良かったと思っている。

鉄骨の作業小屋の材料探しから組み立て、森ともが集う場所「雲集亭」用の間伐材作りから運び出し、土壌中の汚染物質を吸収する燻炭を新潟県から運び入れる作業、苗づくり用の取水口設置など、今では当たり前になっているが、これらはスタッフの意見をぶつけながらすすめてきた。

また、ツキノワグマから己の命を守る経験もした。鹿の食害防止用に張った柵の補強作業中、鹿の死骸を食べに来たツキノワグマと遭った。熊との距離は約一〇㍍、熊の目を見ながら、後ずさりして作業小屋まで逃げた。熊にとっては自分の命を育むための餌だが、私(人間)にとっては命がけでもあった。逃げ切った時の安ど感を忘れないようにしている。

森づくりを始めて一五年が経ち、育てている森から生きものたちの息吹が聴こえるのがとても嬉しい。次世代に私のバトンを渡していきたい。身体が動くうちは森作業を続け、本物の森の姿を見てみたい。

私たちを成長させてくれた森づくり

小井土みつ江(英一の妻)

自然の力で壊され、人間の日常生活ができなくなった足尾。この地に木を植えようと森びとが発足し、私もこの活動に参加して一五年の月日が経ちました。

最初は、このはげ山に木を植えて育つのかと不安でした。丸太で階段を造り、土を背負って荷揚げし、木を植え、草を刈るという作業の繰り返し、苗木が育つと枝や樹皮が鹿やウサギに食べられ、実がなると熊や猿に食べられました。秋から冬は落ち葉が積り、やがてそれは腐葉土に変身し、雨が降れば雨水は地中にしみ込み、色々な生きものたちの栄養になってきました。この栄養で森の木々は育ち、私たちに足尾の四季を楽しませてくれています。

人の手によって蘇った森。一時の人間の都合だけで破壊してきた足尾の自然。人の手によって多くの生きもの命が育まれる森になりつつある様子を見て、ここまでよくやってこられたとつくづく感じます。

初めての取り組みですから、色々な意見を出し合い、いがみ合いもありました。同時に、自然の力に苦しみつつ、春になって若葉の輝きを観て歓び、この恵みを皆で分かち合いました。常に、前向きに活動してきたプロジェクトは人をも成長させてくれました。この仲間たちに感謝しています。

出会った人たちの人情、苦しさや楽しみを共有する人間味は人生の希望をもっているようでした。改めて感謝しています。一五年の森づくりは最高の人づくりでした。

森づくりの展望をきり拓く貪欲な探求心と実行力

斎藤　章（福島県・六一歳）

私が森プロジェクトに参加したのは、現役時代に労組役員をしていた時でした。気候変動が社会問題化になりつつあった当時、「ネイチャークラブ」というクラブが労組内に結成され、その会員となった私。また、労組の「社会貢献活動」のひとつとして始まった森づくり活動にも参加してきました。二〇〇四年末には、森びとプロジェクトが設立され、森びとインストラクター養成講座にチャレンジしました。それから足尾町へ足を運び、宮脇先生から森づくりの理論と実践を学びました。

一五年経っても森づくりの精神が持ち続けられているのは、煙害ではげ山になった地を森に戻すと言って、必死に森作業をすすめてきた諸先輩たちの情熱と実行力に勇気づけられたからです。亡くなられた偉大な先輩の岸井さん、角岸さん、竹内さん、宮下さんから多くのことを教わりました。

森づくりをしながら本物を見分ける知識や観察力を育み、地球規模の自然環境危機に立ち向かう貪欲な姿勢を見つめ、あるいは何事にも前に向かって実践しなければ次の展望は拓けないということを学びました。

特に、「炭による樹勢回復実証調査」では、青木淳一先生、小川眞先生、そしてナラ枯れ対策を独自に開発し実践している小林正秀さん達が国有林内で行った実験の末席で、私は自然界を科学的な視点から観ることの大切さを学ぶことができました。そこでは、森の衰退の原因は人間の経済活動に無関係ではないことをつかみ取ることができました。

新型コロナウイルス感染拡大は私たちの暮らし方を見直すメッセージではないかと感じます。世界中の経済が低迷し、働く者の解雇や雇用不安が相次ぎ、異常気象では豪雨や強風による災害で世界では何千万人もの「気候難民」がテント等に身を寄せ合って暮らしています。日本でも異常気象の猛威は常態化しているように思います。

どんなに人間社会が発展しても、その基盤は森や海が元気でなければ持続しません。人間が吐き出す度が過ぎた温室効果ガス排出は、森や海が育む生物社会を衰弱させています。未来を生きる子供たちには負の遺産ではなく、豊かな天然資源を引き継がなければならないと思います。私は、「森びとプロジェクト委員会」の活動に参加できたことを誇りに思います。諸先輩の志と情熱をしっかり受け継ぎ、地道に“山と心に木を植えたい”と思っています。

錆びついた知識に磨きをかけて本物の森づくり

東城敏男(福島県・六九歳)

私にとっての森づくりは現役時代に培った錆びた知識を掘り起こし、森ともスタッフと共に磨いている。森びとプロジェクト委員会の定款には、「森づくりを通じて自然環境と人間の生命を大切にする心を育む人づくり」という目的の一部がある。森づくりをしていると、森びとスタッフたちの葛藤が見え隠れしている。それに叱咤激励されて、その情熱と志に近づこうとしている。

四年前の森びと通常総会で、私は、足尾のスタッフとJR東労組組合員・家族が育てた幼木を南相馬市で一部枯らしてしまったことを涙ながらに発言した。その原因は、ポットの底まで水が滲み込んでいることを確認するという、育苗の基本的なことを知らなかったことにあった。あまりの緊張感と恥ずかしさが交錯して涙した。「人間の都合で森は育てられない」とも発言したが、後で考えるとその言葉の意味が解っていなかった。

運ばれてきた幼木は、小さなポットの中で三年間も根を張り、草の根との競争、暑さに耐え抜いた。仲間たちはこの環境に負けない育苗を行ってきた。そこにはどんな苦闘があったのか、という組合員・家族の気持ちに寄り添えなかった。そこには幼木と向き合ってきた後輩の気持ちが宿っている。ここに立てなければ“自然環境と人間の生命を大切にする心を育む”ことはできないと思っている。

南相馬市の苗床で育苗作業をしていると、三年間も幼木と向き合ってきたスタッフや組合員・家族の気持ちが分かるような気がしている。猛暑日の育苗作業はできればやりたくない。撒水した後の幼木の葉の水滴を見ていると、“やりたくない”という気持ちはどこかに吹っ飛ぶ。

私は、二〇一三年から始まった南相馬市の「鎮魂復興市民植樹祭」を応援している。南相馬市民ではない私は、当初、伊達市民がどこまで本気なのかという冷めた目で見られている気がしていた。応援隊の一員であっても遠慮がちであった。その結果、森作業は人任せとなり、己の生活の一部にはなっていなかった。

「鎮魂復興市民植樹祭」は今年で八回目を迎えた。昨年までの植樹祭には延べ人数一万六千人以上が参加し、総本数十六万本以上を、三万四千平方㍍もの盛土に植えてきた。市の復旧再生事業は小高区から鹿島区までの総延長一四㌔、幅二百㍍の海岸防災林造りが計画されている。計画通りの森をつくろうとすればあと一〇年はかかるという。

植樹が終わると動けない幼木は草との競争が始まる。草に負けると衰弱し、放置していると幼木は枯れてしまう。植樹を続けていくと草刈り場は毎年拡がっていく。と同時に、苗床のポット苗の草取りも続けなければならない。森の防潮堤の草刈りは市民が自主的に行ってくれるわけでもない。人任せにしていられない事態に追い込まれた。

この時、背中を押してくれたのが足尾のスタッフである。段取り八分、本番二分と言われます

が、足尾の皆さんは、現場を知り尽くし、集うボランティアの立場に立って、事前準備や細かな作業手順を作っている。さらに、集ってくれたボランティアの心と森びとの心をひとつにする演出も描いていた。

植樹祭がうまく継続されてくると「鎮魂復興」という意味が薄れ、植樹祭がお祭的になり、企業の宣伝の場になったりするときがある。そんな時、植樹祭がそのような流れに流されないために、応援隊の目的を話し合っている私たち。

「森の防潮堤」は森の力を借りて津波を弱め、人間が津波から逃げられる時間を稼いでくれる。また、森は生きものたちの命を育む循環を豊かにしてくれる。人工物ではその豊かさをつくれない。森は人がつくるが、人は森を壊す時もある。大切なことは、森をつくる人の心にも木を植えること。鎮魂復興市民植樹祭は、企業のイメージアップの一手段とか、行政の祭りごとにしてはならないと怒った足尾スタッフ。このような市民の怒りが私の知識に磨きをかけてくれている。

応援隊スタッフは七〇歳代が増えてきた。来年、私も古希を迎えるが、錆びついた知識にさらに磨きをかけ、その知恵を次世代に遺していきたい。

森づくりは新たな自分を育ててくれる

仁平範義(茨城県・七〇歳)

ドングリにはたくさんの種類があることも知らなかった私。「森づくりを通じて自然環境と人間の生命を大切にする仲間と連携を深め、地球温暖化にブレーキをかける」という意気込みで森づくり活動に専念してきました。足尾での作業は、自然が相手だけに思い通りにならない事がしばしばありました。しかし、それを乗り越えると喜びや感動は一〇倍になって還ってきました。

一〇年前、ＪＲ貨物労組組合員が「臼沢の森」に木を植えてくれました。この労組のＯＢとしてはこの森を元気になってほしいと苗木の生長を気にかけていました。二〇一九年の秋、その組合員が補植に来てくれることになって、私はその準備をしました。

その現場に行ってみると、急斜面に植えた苗木は草に覆われ、草を刈ってみると苗木は数えるほどでした。気まずい思いをしながら補植をしてきましたが、みんなで声をかけあいながらの作業は、久し振りに合った後輩たちの笑顔で私を励ましてくれました。当日の仲間達は、森づくりで大切なことを私に想起させてくれました。感謝です。

森づくりで大切なことは、苗木が自立できるまでは人の手によって草刈りをしていくということです。大地に植えた苗木は動くことはできません。植えたばかりの苗木は根をしっかり地に張れることができません。生長が不十分な環境下で、苗木は太陽からの恵みをいただく草との競争がはじまります。この競争に苗木が勝って、苗木が自立できるまでは人がその加勢をしなくてはなりません。ＪＲＦＵの森の草刈りを怠っていたのが私でした。

この「JRFUの森」がある「臼沢の森」の斜面は、以前、県が植樹した場所です。ところがその当時の苗木はほとんど枯れてしまい、そこに私たちが木を植え、今では、当時六〇㌢程の苗木が一〇倍以上の木々に生長しています。ここに至る草刈りの作業重要性を忘れていた私でした。人間の都合では森は育てられないということを、改めさせられました。そんなことはわかっているつもりですが、色々な誘惑に負けない己とのたたかいはいくつになってもついてくるものです。こんな事に気づかせてくれた森びとスタッフに心より感謝しています。

描き、構想することの愉しみが生き甲斐へ

橋倉喜一（栃木県・七一歳）

森びとが設立して一五年が経った。私にとっては、あっという間の一五年間だったが、新たな己をつかみ取ることができた嬉しい時間であった。そのひとつが森づくり活動を構想し、それを実現していくことの喜びと楽しみを味わうことができたことである。

これを見つけるまでには生みの苦しみを嫌と言うほど味わった。小さい頃から力は弱く、不器用だった私は、困難な作業に直面するとそれに立ち向かうことをせずに、そのことは他人任せの傾向があった。

四六時中自然と向き合っている足尾での森作業は、そんなことは許されなかった。草地を耕して穴を掘り、黒土や腐葉土、植樹に必要な資材を山の上に運ばなければ木は育てられない。それらは他人だけに任せられない、自分も背負わなければならない。植樹後は、背丈ほどになる草も刈らなければ若木は光合成ができず、衰弱し、枯れてしまう。シカ、イノシシ、クマ、サルの被害があれば、予定していた作業を変更しなければならない。森作業は自然界の動きに左右されることが前提で、農業と似たようなものであった。不器用だからと言って他人には任せられない立場にたたされた。そうなると現場の草木や生きものたちの動きを注意深く見つめていくことになる。この現場に応えることが森作業になり、その計画を立てなければならなくなる。自然界の動きを客観的かつ受け身でもなく、自分の意思に基づいてすすんで働きかけをすることの大切さを学んできた一五年である。

体力を付けるとか、器用になるということは高齢化とともに容易ではない。しかし、森づくり現場を観て、自分の意思に基づいて森作業を考えると現場に行くことが愉しくなる。モズの雛が巣立ちしたか、ヤマユリの花が咲いたか、苗木が草に覆われていないか、熊に柵が曲げられていないか等などが頭をよぎり、その後の作業内容や観察スケジュールが頭に浮かんでくる。

カメラは忘れていないか、集まってくるスタッフたちとはどんな話をするか。森の生長と森に生きる生物たちを会員に紹介する写真を撮りたい、あるいは、ブログで森づくりのリアル感を報告できることが、自然に嬉しくなり、それが愉しさになっている。

森づくりは、人が自然界に働きかける意思と身体を動かし、目には見えない恵みを生産している労働を体験しているような気がする。これを身体で感じ取り、スタッフたちと共有しているからこそ、一五年間の森づくりが継続しているのではないかと思う。

古希を過ぎて、森づくりの喜びと楽しみが感じられるようになった。この何とも言えない気持ちが、次の活動のエネルギーになっている。これは足尾現場に立って、日夜、森づくりをしている強者スタッフたちが創り出した森びとの心の宝である。

そんな猛者たちも、私を含めリタイヤ時期を視野に入れている。今後は、足尾の森(杜)の四季を満喫し、松木村跡地を訪れた方々に森を案内したい。そして、森づくりを担う次世代から頼られる森びとの一人になりたい。

現場スタッフの人間性が森を育てる

福田哲男(栃木県・六五歳)

「まあー、いいか」は、ちっとも良くない。これは森びと先輩からの一言。スタッフの一員でない意識になった時、無自覚的に自分の本性が出てしまう時に、「まあー、いいか」となる。

足尾の森作業のように、大人数で道具を使い回している時は、その道具は次の仲間が使う。そのことを考えて道具の整備や整理整頓は、当然のようにスタッフはやっている。しかし、作業に疲れている時や帰路につく直前には、そのことが後回しになり、誰かがやってくれるという自分かってな意識になる時がある。そんな時、そのスタッフに注意を促すことは勇気がいる。もしかすると、注意した自分が嫌われ、人間関係を壊してしまうのではないかと迷う。

このような場面が幾度となく積み重なってスタッフの絆が太くなり、一五年間の森作業が続いたのだと思う。この過程にいた一人として、躊躇しないで声に出すことが、森びとスタッフの人間性を高め、と同時に、森が生長していくことにつながっていることを自覚させられています。

ある年の冬、越冬のためにビニールハウスにポット苗を運び入れ、厳しい寒さからポット苗の凍結や乾燥を防ぐ準備作業の時、ポットの底穴から土を見ると、底は乾燥状態でした。撒水方法は、エンジン噴霧器やジョウロを使いました。ジョウロをポット苗まで何回も運びながらの作業が終わった時、「やれやれ」と思い、私はジョウロを地面に置きました。その時、「福田君、ジョウロの底に籾殻等が付かないところに置いてください。タンクのコックの部分がゴミで詰まってしまいます。次に撒水する人の事を考えてください」と、注意を受けた。

確かに籾殻や落ち葉がジョウロの底に付着していることに気づいた。私は、「やれやれやっと終わった」とばかりに自分の事しか頭になかった。瞬間的には、「なんだよ!」と思ったが、先輩の一言の意味を噛みしめた。

年齢・性別はもとより生活環境が異なる多くのスタッフが、「地球温暖化をなんとかしなくては」と願って足尾に来ている。当然ながら、森作業を進めるうえでも意見対立がある。夏のスタッフ会

議の場や森作業前の打合せでは、スタッフが思いや意見の溝があればそれを埋め、まとめ上げるのはとても苦労すると思う。

素人集団の森づくり挑戦の一五年間は、スタッフの知識を森づくりの知恵に育ててきたと思う。どんな意見だろうと、些細な事であろうと“ふるさとの木による命の森づくり”のために話し合ってきた結晶が、足尾・松木沢の森(杜)になっていると思う。宮脇先生の理論、故・岸井さんの志を森づくりに活かす未経験の挑戦が、未来を生きる若者たちの命を育む森になっていると思う。

自然界のメッセージから学ぶ有難さ

増子　公一(福島県・五七歳)

木は育たないのではないかと言われていた足尾の荒廃地に木を植えた。一五年後の今、その地には小さくても元気な森が生長している。足尾の草地が森に甦っている様子を観ていると、足尾現地で森作業を続けてきた諸先輩の労苦、そして、宮脇先生、故・岸井前理事長の教えがあったからだと思っている。理論や志を信じて、信じたことを実践してこなければ今の森はなく、実践してきた諸先輩の労苦に頭が下がる。演説や本に書かれている通りに森は育たない。

南会津の国有林の一部で行ってきた「炭による樹勢回復実証調査」でそのようなことを実感している。炭の効力を活かして衰弱した木々を元気にさせ、カシナガがコナラに穿孔しないようにできないかと実験してきた。一〇年程の実験だったが、結果は、菌糸が増えたこと、カシナガの穿孔跡がみられなかったことくらいだったと思う。

自然界の仕組みや不思議な力は人間の思う通りにならないと思っている。むしろ自然界の仕組みや力に学ぶことが多いと思う。

世界中が地球温暖化の原因で異常気象が大暴れし、生物社会の生きものはそれに適応しなくてはならなくなっている。私は、一五年間の森づくりで心に植えてきた木(気)を、次世代、地域の方々の心に植えていければ幸いである。

「よそ者」と住民の心をひとつにする森づくり

松井富夫(東京都・七三歳)

“よそ者に何が出来るか”という顔つきの町民が忘れられない一五年前の足尾入り。向こう一〇年を目指し、厳しい環境と条件の基で森づくり事業が足尾・松木村跡の荒廃地でスタートしました。

何のノウハウもない、宮脇昭先生の理論だけの出発でした。森づくり事業を整えるには、地主の方々、木を植えている皆さん、そして行政や企業とのコミュニケーションをどう築き上げていくのかが大切でした。

地主との土地使用・借用契約、入山許可の申請は栃木県に、階段用間伐材(檜)の提供は日光森林組合に、植え方や道具のアドバイスは林野庁日光森林管理署、入山許可の登録やゲートキーの申請と借用は国交省足尾事務所、植樹祭用の弁当やテント借用は足尾町の皆さん等にお世話になりました。植樹祭などでは地産地消を心がけ、地元で賄える商品を購入してきました。また、森づくりでは現場がもっとも重要でしたので、寝泊まりが出来る社宅を古河機械金属㈱から賃貸しました。

当時の赤倉社宅は長屋形式で、隣に住む世話役Kさん、近所のTさんには大変お世話になりました。私はこの社宅に、月二～三日ほど世話になりましたが一週間以上寝泊まりしていたスタッフからは近所付き合いの様子を聞いていました。

殆どの社宅は空き家でしたので、その周辺は人が手を入れないと荒れ放題になりそうでした。また、毎年人口減少の足尾町でしたので、荒れ放題の環境整備は課題でした。そのような中で、スタッフたちは、即、身体を動かしました。冬、雪が降った時の除雪方法、草刈り場所などを隣のKさんから教わり、環境整備をしてきました。Tさんからは公民館周辺の草刈りをお願いされ、森作業で使っている刈払い機で周辺を整えてきました。

ツキノワグマが出没した時などは、熊の情報交換するようになっていきました。そんな中で森づくりの話もする関係になっていきました。この地域の皆さんとのこうした関係は森びとスタッフにも伝達し、森びとスタッフ全員の目配り、気配りそして心配りの芽を伸ばしてきました。

隣のKさんはビールを飲まずに日本酒が好き、近所の方々から頼られている人。Tさんは小学生を相手に本の読み聴かせをしている人。お付き合いでの気配りや心配りを感じ取ることができました。こうしたお互いの付き合いは、暑い時、寒い時の健康管理を心配する言葉や差し入れなどに現われています。Tさんは正会員に加入していただき、森づくり作業を一緒にやってくれるお付き合いができました。

今では、森作業に向かう途中、車の中から朝の挨拶をすると、歩いている住民の方からも挨拶をしてくれる方がいます。どうやら、地域のお祭り等の世話をしているKさんやTさんから、私たちの森づくりが地域の方々にも届いているような気がします。だからと言って森作業を一緒にするというのではありません。“よそ者”ではなく、松木村跡地で木を植えている人たちだということが分かってもらえているようです。

目には見えないことですが、住民でない私たちが地球温暖化にブレーキをかけていくために森づくりをしていく活動を地域に拡げていくことの難しさを実感しています。私たちの合言葉である“山と心に木を植える”ことの意味の重要性は、森づくり一五年経っても私たちの課題なのだということを忘れてはならないと思っています。

立ち位置が拡がった私の森づくり

松村健（群馬県・七六歳）

一五年前、私は定年退職を迎えて家でのんびりしていた。ある日、後輩から「松村さんは昔、足尾線で機関助士をやっていましたよね」と尋ねられた。「乗務していたよ」と返事をすると、後輩に「足尾に木を植えるので手伝ってくれませんか」と言われた。木を植えるだけなら手伝えると思い、私はふたつ返事でそれに応じた。

後輩と二人で足尾の現地調査と打合せに出向いた。参加者全員は始めて会った方々。その時は、緊張の連続で精神的に疲れたことを思い出す。後輩からは大変なことをお願いされてしまったと思ったが、どうせやらなければならないのであれば気持ちを切り替えて、楽しくやろうと思った。

その後は、森づくりの会議やその準備で顔なじみになり、色々な技をもっている方々と知り合うことができた。最初に植樹を始めた「臼沢の森」は、傾斜が三〇度以上はある草地だった。ここに植林していくためには階段を造らなければならなかったので、その階段造りは千葉県房総の相川さんに教わった。その材は、日光の奥地で間伐した材で、その運搬も我々が行った。力仕事はなんとかこなしてきた。

私にとっての一五年間は、北海道から西表島の方々との出会いによって現役では知ることのなかった世界に飛び込んできた時間であった。この過程では、命の大切さ、自然の恵みの有難さ、自然は楽しさを与えてくれること、さらに、人間は支え合わなければ生きていけないこと、そして人は森に支えられていることを教えられた。

北海道では猟の醍醐味を楽しんだ。旭川ＭＳ会との交流で知り合った難波さんからは、エゾシカのハンティングを案内していただき、広大な大地での鹿猟を体得することができ、その一部を足尾のスタッフに振舞った。西表島では、海なし県の私には想像もつかない森と一緒に寄り添って生きるおおらかな人々ののんびりした暮らしがうらやましかった。九年前の三・一一東日本大震災では、フクシマ原発事故の恐ろしさと津波の恐ろしさを身をもって感じた。感じとったら何か出来ることをやらなければならないとして、その後は南相馬市応援隊の「森の防潮堤づくり」を応援している。

世界各国では台風、大雨、熱波、山火事等が想定できない規模で私たちの暮らしを脅かしている。この原因のひとつが地球温暖化と言われている。これを抑えていくために私たちは森を育てているが、市民の力だけでは微力でしかなく、地球は益々衰弱している気がしている。森づくりをしている私からすれば、政治政策として全世界で森づくりしなければならないと思っている。

スウェーデンの女学生・グレタさんのメッセージは限られた人生を歩んでいる私たちへの忠告だと思っている。このような事を考えられるのも森づくり一五年の賜物だと思う。後期高齢者となり、あと何年森づくりをできるか分からないが、頑張っていきたい。支えてくれたスタッフの皆さんに心から感謝します。ありがとうございました。

新たな発想を実現できる歓びが育てた足尾の森

松村宗雄(群馬県・七五歳)

森びとの森づくりの「根っこ」になっていることは、宮脇昭最高顧問の「やるなら一番条件の悪い場所で」ということで足尾を選んだこと、故・角岸幸三(前副理事長)の「八幡平の強酸性土壌では木は育たないかもしれないが、枯れた木は次の木が育つ土になる。未来のために今、何をするかだ」、と思っている。また、「環境は人間がつくる、自然は放っておいたらダメになる」(安倍勝次ことあべ蝶吉さん)ということが印象に残っている。

木は人間の都合では育たない。自然界に自分の時間を合わせる。言葉では簡単だが、自然環境はそんなあまっちょろいものではない。「山と心に木を植える」なんて生易しいものではないことを実感している。一五年間、足尾の森づくりで教えられたことがいくつかある。これから生きていくうえで、とても大切な気がしている。

意思疎通(コミュニケーション)には生みの苦しみが隠されている。私もそうだが、自分の意見をその場で通したいということがある。相手の言うことも訊くということを抜きにしてコミュニケーションは成り立たないと思う。足尾では、泥臭いやり取り、時には取っ組み合いの大騒動寸前までになったこともある。大げさかもしれないが、これなしに足尾の森は育たなかったかもしれない。

会津の只見町布沢集落で、「カタクリの里」の側溝さらい、「憩いの森」の散策路階段補強を手伝った。普段の気持ちで手伝ったが、どうして私たちの手伝いを受け入れてくれたのかを振り返ってみた。集落民の高齢化と人口減少で大雨災害復旧に時間がかかるという話を聞いて布沢集落に行き、本気になって土砂を片付けた。また、ブナの森の散策路が滑って危ない、というので森の木を伐って一〇〇段以上の階段を造った。住民は喜んでくれた。私も含めスタッフたちは必死になって土砂を片付け、階段を造った。この本気度が集落民に伝わったのかもしれないと思っている。本気に勝るものはないことを体験した。

私立樹徳高校生との夏休み環境学習交流が続いている。女子高校生にカツラの葉の臭いを試してもらった。一人から「甘茶の香りがする」(甘茶:四月八日のお釈迦様の花まつりに振舞われるお茶)と言われた。記憶が薄い甘茶を足尾で振舞うことはできないかと思い、甘茶の木を育てている。

強制でなく、義務でもないことを発意し、実行することの楽しみが足尾にはある。目的や目標を達成する歓びがあるから楽しい。失敗の繰り返しでもいい、一五年間に教えられた足尾の森づくり。

何もなかったところから、よくぞここまで来たなと思っている。苦楽を分かち合えるスタッフに巡り合えた一五年。足尾は新たな発想が誕生する宝庫である。年だから、「いまさら・・・」、「もう・・・」ではなく、何かを見つけて「いまから・・・」に意識して、背のびをしていこうと思っている。新型コロナウイルスが沈静化しない今、お互いに感染しない、うつさないを注意してやりたい事や好きな事を成し遂げるには健康が第一です。

先人の遺志を形にする私のこれから

柳澤　肇（群馬県・六一歳）

四〇歳を過ぎ、二一世紀に向けて自分への課題として長く続けられることはないかと思っていた時に、ポット苗づくりに参加できたことは森ともたちに感謝しています。足尾の森づくりを始める前、私は北海道大沼で開催されたポット苗づくりに三回参加しました。どんぐりの一粒、一粒が森をつくれるのであれば面白いことだなあーと思ってから二〇年近くになります。

二〇〇五年の秋に初めて足尾の植樹祭に参加しました。その前段では、「グランドキャニオンが見えるところだ」と聞いていましたが、現地に到着した際にそれはまさに印象的でした。一緒に現地に立った仲間からは、この地は村人の生活があった所、亜硫酸ガスの煙害で山々の樹木は枯れ、村人は村を離れなければならなくなったという歴史があったと説明されていた。文化のひとつが消されてしまった感じがしました。

自宅から足尾まで片道一〇〇㎞余り、最初は遠く感じました。木や花の名前も知らない自分に何ができるのかと心配でした。しかし、この活動には人間の支えがあり、森作業を補ってくれる人がいました。自分の居場所を感じ取れることが張り合いとなり、一六年間も続いています。

最近、山々の新緑、紅葉、沿道の木々の開花や果実の実り、田植え、稲刈り等の四季の移り変わりを感じながら足尾現場に集う仲間に逢いに行く二十五里です。

今までのやり方や経験では対応しきれない現象が起きている中での危機管理、足尾では集中豪雨により松木川の水位が上昇、山肌が崩れて道が通行止めになったことがあります。私も自然界の猛威の恐ろしさを感じています。

亡くなられた岸井成格氏（前理事長）は機会ある毎に、「文明の転換期」という言葉を言っていました。まさに転換期を迎えていると思います。

森づくりは、植林ボランティアの思いを受け止め、その思いを裏切らないために、木々の管理が重要です。食害対策や防護網の修繕、いつもと違う自然界の動きに気づき、発見したことを共有し、対応してきたことが現在の森につながってきていると思います。

故・岸井さんは、情勢や自然界の動きを的確に捉え、それに向き合っていくことが大事だと言っているのではないかと思います。

私の父は亡くなって十一年目になります。生前、父は三回足尾に行き、森びと広場整備、土手の土盛り、「絆の森」会場造りでは岩の搬出などを手伝ってきました。父からは「あてにされる人間にならなきゃ駄目だぞ」と言われましたが、今の自分はまだまだです。

現在八八歳の母からは、「我が身をつねって人の痛さを知れ」と言われてきました。また、小学校入学の時は、両親からは「挨拶と返事はちゃんとする」、中学生の時は、「苦労は代わ

ってでもしなさい」と言われました。それをなんとか実行しているのが定年退職後の私です。

二〇〇五年の第一回植樹祭で植えた苗木の樹高は一〇㍍を越え、小さな森に育てています。森の中に入ると、夏は涼しく、心地よいひと時を過ごせます。一五年間の森づくりを振り返ってみると、“良くやった”と讃え合ってよいと思います。その過程には言い尽くせない労苦がありますが、四季折々の森を見ると心が熱くなります。天空の森へ旅立った岸井成格さん、角岸幸三さん、宮下正次さん、大野三治さん、竹内巧さんも褒めてくれるのではないかと思っています。

一五年経つと、森づくりスタッフの年も重なっています。社会的にも、森びとでも世代交代（伝承・継承）が課題になっています。現場を知る若者を歓迎したいのですが、会社員という本職が第一ですので、六〇歳代の私たちがその前を走らなくてはならないと考えています。

異常気象とコロナウイルスの「複合災害」という渦の中で生活する私たちですが、森づくりの意義と必要性を多くの方々と共有し、森と人とのつながりを大切にする仲間たちと森づくりをすすめていきたいと願っています。

私の森づくりを支えている諸先輩の教え

梁次邦夫（沖縄県・七一歳）

二〇二〇年七月七日で沖縄辺野古新基地反対ゲート前座り込みが六年経過した。辺野古でのテントでの抗議行動は二十二年に至っている。

沖縄の仲間たちは第二次大戦で本土防衛の捨て石とされ、二〇万以上のむごい地獄を身体で知っている。「軍隊は地民を守らない」「軍事基地こそ人殺し基地」ということを再び繰り返してはならないと、身体を張って叫び続けている。それだけではない。辺野古大浦湾は二六二種の絶滅危惧種を含む五千八百種以上の生物が確認されている。海の宝庫である。また、高江のヘリパット基地の森林破壊によって沖縄の山、森は悲鳴をあげている。

人間破壊、地球破壊の大国の戦争戦略、戦争政策に目をつぶってよいのか。未来の子供たちや真の平和、豊かな自然を守るために私も沖縄の地で闘い続けている。

“人間は自然に生かされている”“自然愛、自然への畏敬の念”を真に抱いたのは、二三年前、初めて足尾に踏み入れた時である。足尾銅山前までの緑の世界が吹き飛ばされた荒涼たるハゲ山、岩山の連続に声を失ったことをいまだに覚えている。私たちに足尾の現実と歴史、課題を語ってくれたのは『足尾銅山中国人強制連行の記録・痛恨の山河』の著者である故・猪瀬建造氏でした。猪瀬氏は中国で殺りく行為をした贖罪の意味を込めて、足尾に連日入り、調査記録し、慰霊塔づくりに貢献した人である。

足尾は富国強兵のもとに、山河を破壊した日本の公害の第一号であり、農民と共に闘ったのが田中正造である。また、永岡鶴蔵や南助松たちが中心となって日本初めての労働争議も学ぶことができた。この足尾で、公害・自然破壊・中国人強制連行、それに抵抗した人たちの生き様をしっかり学び広めていくことができた。

その足尾の森づくりに猪瀬氏は、「国、古河の責任だ」と否定的であった。しかし、私たちの植樹活動に猪瀬氏は、「森づくりを実践してこそ国、古河と闘うことができる」と、逆に反省し、その後も指導してくれた。

それから七年後、森びと足尾植樹活動が展開され、私もその第一回目のインストラクターに声がかかった。この時は本当にうれしかった。足尾こそ日本資本主義の矛盾、課題が露出し、多くの労働者・農民・中国・朝鮮人を含めた人間破壊の場であることを示してくれる。森びとを通じて、本物の森づくり、人づくりを学び、実践し、多くの事を学び合った。自然と真正面から向き合うことで、地球を目先の金や戦争の道で破壊するのも人間であり、集団である。だからこそ、それに抵抗し、未来を築くのも人間であり、その集団である。

沖縄に移住して五年になる。畑作をしながら、平和活動、地域活動に忙しい日々を送っている。百姓は百の知恵をもつという。土に触れると働く喜びを味わう。平和・地域活動で真の人間社会をめざしている。『自然と人間』という雑誌で松崎明氏は、「人間愛を組織的に表現できる者は自然愛を同心円で表現できる」とさし示していた。森びと一五年を区切りとして、新たな飛躍が求められている。共に、がんばりましょう。

大人の遊び基地で広がる未来の暮らし

山本　勉(栃木県・七五歳)

第四期森びとインストラクター養成講座に参加して十一年が経ちました。十年ひと昔といいますが私にとっての森びとの十一年は昔ではなく現在あり、未来であります。

退職後の生活をあれこれ模索している時、森びとのインストラクター養成講座の募集を見つけました。その時これだと瞬間的に感じ、すぐに申し込みました。行動的でない私にとって驚くほど速い動きでした。それ以来十一年、私の勘は外れてはいませんでした。

現在の私の生活はほとんど感で決めた事柄で成り立っています。足腰を鍛えるのは何がいいかと考えていた時、これからは自転車の時代が来るとひらめき、それから三五年間も走っています。森びとの活動も大当たりでした。

今回の「心の宝物」という企画の原稿依頼を機会に十年以上続けている心の中にある泉はどこにあるのか改めて考えてみました。

第一の泉は、自然の中のありとあらゆる生き物は（人間も含めて）、微妙なバランスで生かされているということが実感できることです。厳しい生存競争があるものの決して他者を滅ぼさないように自分をセイブする能力を持っています。アイヌの人達は「我々は自然の恵の利息で生きていたが、今の人は元本まで手を付けて生きている」といっています。

次に私が続けてこられた泉は、足尾に行けば自然について同じような思いを持った仲間と会えることです。少しその思いは違っていても自然が好きという根っこが同じであれば受け入れられる多様な考え方のある仲間が集まっていることです。

三つ目は、足尾では何でも自前で作ってしまう工夫の泉です。個々に自分の得意な能力をそれぞれの場面で発揮し、何でも形にしています。得意な能力がない人は力を貸せばいいのです。これは、我々が子供の頃の周りにあった物で何でも作って遊んだ体験が、足尾の森づくりで生かされています。足尾は大人の遊びの秘密基地のようなところです。

私の心の中には自然界は何でも教えてくれて、楽しい人生をつくってくれるという記憶があります。今の子供たちにはそんな機会が少なく、可哀そうです。何事も便利さを追求するあまり、物作りや森づくりで自然界と触れ合う楽しさを体験できずにいます。

この十年の間にはもっともっと多くの泉がありました、小さな泉が溜まりに溜まって大きな泉になって、今も、私を足尾に通い続けさせているではと思っています。ここまでこれましたのは森びとスタッフのご協力のお陰です。身体が続く間はこの泉の中で過ごしたいと思っています。これからもよろしくお願いいたします。

■編集を終えて

森びとシニアから貴重な心の宝物を寄稿していただきました。八幡平市の松尾鉱山跡地の森づくり、足尾町の松木村跡地の森づくり、南会津での森を元気にする炭による樹勢回復実証調査、そして森の防潮堤づくりの現場に起ってきたシニアの方々に執筆をお願いした結果、十九名の森びとシニアから次世代の森びとへ伝えたい「心の宝物」が送られてきました。文章にはたくさんの宝物が秘められていましたが、編集では、森びとの次世代にとって忘れてほしくない「心」に絞って文章をまとめさせていただきました。

何故なら、寄稿された文章は、地球温暖化にブレーキをかけなければならないという人類の問題に初挑戦してきた一五年間の試行錯誤の歴史だからです。短い歴史とは言え、現役をリタイヤした多くのシニアが経験したことのない森づくりでありながらも、故・松崎明さんの問題提起に賛同して森づくりを理論的かつ実践的に指導してくれた宮脇昭さん、その活動をけん引してくれた故・岸井成格さん、故・角岸幸三さん、故・竹内巧さん、故・宮下正次さん達の志の端緒をつくり出したことは後の世代にとっての宝物にしてほしいと願って

いるからです。また、人類の生存が危ぶまれている現代社会においては、生存を持続させる活動の小さな種火になってほしいと願っています。

さらには、森づくりの専門家からは「素人に森がつくれるのか」と揶揄され、育樹活動に駆けつけてくれたボランティアからは「あんなキツイ作業には、二度と行きたくない」という声を耳にしてきた中でやり抜けた情熱には、シニアたちの第二の人生が凝縮されているからです。

人間の強欲によって壊した自然界を蘇らせるには天然の力だけでも可能です。しかし、人類の生存危機が叫ばれている中では、破壊され、衰弱している自然界を蘇らせるには時間が足りません。そんな中で始まった「時短の森づくり」とでも言う「ふるさとの木による命の森づくり」に初挑戦したのが私たちです。スタート時点の森づくりは土日祝祭日に限られた活動でした。ところが、自然界はそんな人間の都合を待ってくれませんでした。そこで森づくり現場の主役になったのが、比較的時間の余裕があったシニアたちでした。

私も含めて多くのシニアは森づくりのど素人。そのシニアが育てた小さな森は、多くの機能を発揮し、生態系が豊かになっています。この過程には、不思議で複雑な魅力が潜んでいる自然界との葛藤、先人の志を継承する情熱、森づくり運動を担うシニアの心をひとつにする熱い議論、そして、実践なき展望は有り得ない、故に、失敗は恐れないとする信念がありました。足尾町と八幡平市の森にはそんなシニアの魂が宿っていると思います。

時あたかも、地球温暖化による想定外の異常気象に怯えて暮らす全世界の人々。その上、世界中で百五十万人以上が命を奪われているコロナ禍にあって、地球に生存する人類の生き方が問われている私たち。森びとシニアの一五年間の「心の宝物」には、その問いを解くヒントが滲み込んでいる気がします。

足尾・松木村跡地の森(杜)、八幡平市・松尾鉱山跡地の森、そして福島県南相馬市と宮城県仙台市、名取市の森の防潮堤の百年後は、未来を生きる生きものたちの命を育む土台になってくれるでしょう。

“山と心に木を植える”運動を実践してきた森びとシニアの皆さん、お疲れさまでした。そして、森づくり運動を共に創りだしてくれたすべての団体、個人の皆さんに心からお礼申し上げます。

森びとシニアの森づくり活動は限られた時間になるかと思います。シニアたちは、杖をついてでも身体が動くうちは森づくりをエンジョイしていきたいと誓い合っています。

二〇二〇年十一月

理事・高橋佳夫